

令和4年度第38回全国高等学校新体操選抜大会審判員報告書

C3 審判長 安福康夫

1 採点上打合わせた事項

本大会は、選手の技術的価値や演技の熟練度において、大きなばらつきがあることを十分に考慮して採点業務にあたることを確認した。団体競技では、4人または5人で出場するチームが多いこと、同じチームでも選手の技術力に大きな差があることを前提にどのような順位付けが望ましいかを話し合い、特に下位層での採点練習を重点的に行った。個人競技では、ジュニア時代から活躍している選手が多く、ハイレベルな試合が想定されるため、上位層での採点練習を重点的に行った。技に重きを置いた選手と動きの質に力を入れている選手などの見極めなどと採点について話し合った。構成実施それぞれの内容は、主任審判のレポートを参照してください。

2 採点上起こった事項とその処理

特になし

3 その他特記事項・意見・感想

新ルールになり2年目となり、チームや選手の演技に変化がみられたように感じる。

団体競技では、各選手的能力に合わせ、どのように加点をとっていくのか、あえて加点を狙わずに、選手ができる技を確実に実施する方法を選ぶなど、チームごとの努力が垣間見られた。いくつかのチームは、転回系は無理をせず、選手が確実にできる内容にし、その分徒手の動きにこだわり、団体の演技として非常に魅力的な仕上げをしていた。また人数が足りないチームがそれを感じさせない演技構成と実施で、人数による不利を考えるとかなりの高得点を出すなど、各選手や監督の努力とその想いがつたわる大会であった。

個人競技では、ほとんどの選手がジュニア世代から活躍している選手ということもあり、多彩な技と熟練した動きで、レベルの高い大会となった。特に上位陣は全日本レベルに到達している選手もおり、夏の大会での再戦がたのしみである。その際は技よりも動きの質の差が問われるのではないかと感じた。

最後になりますが、本大会の運営に当たられたすべての役員・補助員の皆様に、素敵な大会を開催していただきましたことを、心から感謝の気持ちをこめて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

1 採点上打合わせた事項

(1) 個人競技

- ・採点では、手具操作や技術的価値、多様性等に加え、難度要素・要求要素、加点を総合的に判断すること。
- ・審判員の位置により演技の見え方に違いは当然あるものとして、自信を持って採点した得点を出すこと。
- ・加点に該当するか否かについては各審判員の判断によるものとするが、難易度の高い連続投げや視野外の投げ受けについては、共通理解を図った。

(2) 団体競技

- ・採点では、技術的価値や多様性、音楽等に加え、難度要素・要求要素、加点を総合的に判断すること。また、団体競技として求められる同時的内容やその工夫された演技構成を評価すること。
- ・4～5人編成の出場チームも複数校あることや新チームになったばかりという時期的で、要素を満たさないチームやチーム内の選手の技術の差があることも想定されるので、演技全体の完成度を見極めること。
- ・転回系群の各種スタート要素、難度や価値と徒手系技群の組み合わせについても十分に確認をすること。

2 採点上起こった事項とその処理

特になし

3 その他特記事項・意見・感想等

まずは、大会運営に当たられた全国高体連体操専門部、(公財)日本体操協会、主管の静岡県高体連体操専門部、補助役員の皆様のご尽力により大会が成功裏に終わったことに御礼申し上げます。徐々に新型コロナウイルス感染症拡大前に戻りつつあるものの、様々なご配慮等苦勞されたのではないかと推察されます。

個人競技について総括すると、選手の技術レベルが向上しており、これまでの選手や指導者の努力の成果を垣間見ることができました。しかし、難度にこだわるあまり、演技全体のバランスに偏りがある選手もみられました。新ルールになり2年目ですが、その内容をよく研究していることが理解できます。

団体競技について総括すると、こちらもチーム全体の技術レベルは確実に向上していることがうかがえます。演技構成も各チームの特性を生かしたものになっていました。しかし、加点要素は全体的に多くなく、転回系の中で途

切れてしまっているチームもみられ、今後に期待するところではあります。

今回、団体出場の19校のうち、6校が4～5人で演技するという状況であり、男子新体操の普及に関して課題を呈していると思われます。

C3 実施主任審判員 荒井暁二

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 団体・個人共通

- ・徒手系運動の質に関する部分(A減点の部分)について、基本的運動ができているか、(緊張と弛緩、重心の引き上げ、運動の幅等)また、上半身の運動だけでなく下肢の中(踏み込みの深さ)、四肢の制御等、熟練度等について確認。
- ・選手不足やコロナ感染症の影響もあり、個人、団体ともに練習ができていない、下位層の選手が出場する事が考えられ、採点に苦慮する事を考え映像での減点確認を行い、採点に大きな差がないよう確認。
- ・減点をした後、演技でよかった部分や作品全体としての徒手の部分と出来栄えを考える事、を確認。

(2) 団体競技

- ・6人、全体の運動の質をみて、平均化してAの部分の減点を行うことを確認。(1、2名の選手が全くできていない事が想定される)
- ・4名・5名での演技の場合の採点確認。
- ・転回系、徒手系のミスをした時の減点幅の確認。

(3) 個人競技

- ・基本的な手具操作ができているか、手具の特性がいかされているか、身体との一体感はあるか等の確認。
- ・運動の質をきちんと見る事、ミスがない、きれいにできている等でごまかされないよう確認
- ・持ち方・投げ受けの処理の仕方での減点に対する共通理解を確認。
- ・シェネやタンブリング時の軸ぶれ及び膝割れ、着地姿勢、空間姿勢の減点をしっかりとる事を確認。
- ・4種目あり得意・不得意があると考えられるので前の種目に惑わされないよう確認

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・特記する事はありませんでした。

3. その他特記事項・意見・感想等

(1) 団体競技

- ・コロナ感染症の影響が大きいと考えられるが、ほとんどのチームが練習不足であることを、また、4名、5名で参加のチームも多く部員不足や未普及の競技であることを感じました。
- ・昨年度と比較すると下位チームが少なくなっています。しかし、無理なタンブリング多く演技をまとめ上げることができていませんでした。また、上位2・3チームはミスもありましたがある程度完成されています。中位のチームが多く運動の質に関する部分でもほとんど差がなくA減点に苦慮し、審判員の点数にばらつきがあり、協議することが多くありました。

(2) 個人競技

- ・運動の質に関する部分で運動の巾を広げていく方向が左右方向になり上下が少ない為運動に違和感を感じた事が多くありました。
- ・難度を取るために同じような投げ受け、タンブリングが多く演技内容が同一化している。
- ・選手の能力に合ったタンブリングをする事と、タンブリング中の手具操作ができていない。
- ・手先だけの運動や、誇張された運動が多く使われるようになってきている。また、手先、足先が伸びていない選手が多く見られた。
- ・コール前、演技前で待っている時、手具操作をしてしまう選手がいました。

(3) 全体的所感

- ・このコロナ禍で今大会が成功裡に終わられたことは、関係者の皆様の並々ならぬご支援のおかげであり、深く感謝と敬意を申し上げます。